堂ノ本眞先生のご退職にあたって

法学部長　石上　泰州

堂ノ本眞先生は、平成二四年七月に平成国際大学の学長に就任され、爾来、令和二年六月末までの二期八年の間、本学の学長として、また、佐藤栄学園の常務理事として、本学と学園を力強く牽引されてこられました。先生は、ことに本学にとりましては「中興の祖」と申し上げるべき功労者であり、任期の定めとは申せ、昨年、先生が本学をご退任されましたことは、まさに柱石を失うがごときであります。

堂ノ本先生は、昭和一一年八月にお生まれになり、高校ご卒業までは北海道ですごされました。東北大学法学部へご進学後は法曹を目指され、晴れて司法試験に合格されますと、検事としての道を歩まれることになります。仙台を振り出しに、盛岡、長野、長崎、浦和、東京など全国各地の地方検察庁で勤務された後は、札幌高等検察庁を経て、法務省人権擁護局の総務課長という要職に就かれました。その後、東京高等検察庁、最高検察庁の検事、広島法務局長などを経て、福井地方検察庁の検事正を最後にご退官されました。

順風満帆の検事生活を終えられた後は、東京法務局所属の公証人をお務めでございましたが、平成一八年、縁あって、佐藤栄学園に監事として迎えられます。平成二四年には学園ナンバーツーの常務理事に昇格され、森山憲一前理事長とともに、佐藤栄学園を指導されるお立場に立たれました。

そして、同年七月、学園の常務理事職をご兼任のまま、本学の学長に就任されることとなります。当時、本学は慢

性的な定員割れが続き、財政も悪化しておりましたので、こうした状況を改善することが、堂ノ本新学長に託された使命であったのかと存じます。

先生はご着任早々、大学改革に着手され、当時、法学部長であり、後に副学長となられる溝呂木健一教授に命ぜられて、大学改革プロジェクトを立ち上げられました。そこにおきましては、カリキュラムの見直しや公務員試験対策の拡充、学生募集活動の強化などを矢継ぎ早に指示され、新学長の就任を機に、従前の沈滞しかかった空気が一変したかのように記憶しております。

そうしたなかで先生は、本学ではかねてより、運動部の学生を中心に保健体育の教員免許取得への希望が根強いことを重視され、まずは、通信制の星槎大学との提携を推進されました。その後、保健体育の教職課程を備えたスポーツ系の学部の設置こそが、当時の本学の難局を打開するとともに、本学に対する社会的な期待に応えることのできる、最善の道であるとのお考えに至られたのかと存じます。

先生は、新学部の設置準備組織を発足させますと、学園本部へ足しげく通われ、また、文科省へも自ら足を運ばれるなど、先頭に立って、新学部の設置に向けて汗を流されました。そして、平成二九年四月、村田芳子学部長をはじめとする新たなスタッフもお迎えして、計画通りにスポーツ健康学部は開設の運びとなりました。

同学部は開設以来、入学定員を充足し続け、この三月には初めての卒業生を世に送り出すことになりました。また、この間、法学部も堅調であり、大学全体としての入学定員が確保できる状態が続いております。

あらためて振り返りますに、堂ノ本先生が本学にご着任された当時、収容定員一二〇〇名に対して学生数は九八〇名ほどであり、大学財政は大幅な赤字でありました。これが、二期の任期を全うされてご退任される時点では、学生数は一二五〇名を超え、定員割れ状態から抜け出すとともに、大学財政の健全化も達成されております。学園の常務

理事として、自ら大学の経営改善の最前線に立たれた堂ノ本先生は、見事に使命を果たし、いわば、V字回復を達成されたと申し上げるべきかと存じます。

大学存亡の危機にあたって、堂ノ本先生という卓越した指導者をお迎えできましたことは、今となっては、望外の僥倖であったとしか申し上げようがございません。スポーツ健康学部の設置準備の世話役や法学部長として、近くにお仕えさせていただいた身としては、なお一層、その幸運に思いをいたさずにはおられないところであります。

かように、堂ノ本先生は、いわば、学園内の不採算部門の立て直しに成功された経営者であられたわけですが、それだけではなく、やはり、教育機関の長たる「学長」でいらっしゃいました。先生は、学園本部にいらっしゃる時間はわずかで、ほとんどの時間を大学のキャンパスでおすごしになられました。そして、諸々の重要なご判断をされるときには、大学にとっての、学生にとっての利益を第一にお考えくださっておりました。教育機関の長であるということに対する使命感と責任感が、先生の実行力を支えていたのではないかなと、勝手ながら、想像するものであります。

さて、堂ノ本先生は、お酒や歌をこよなく愛する、粋人でもいらっしゃいます。度々酒席にお誘いをいただきましたが、部下を和ませる、穏やかな、楽しいお酒でございました。また、大学近辺での酒席では、よく地酒をたしなまれておいででしたが、地元を大切にする、そして、赴任地に溶けこもうとする、検事時代からのポリシーなのかなと拝察していた次第です。

カラオケに興じられることもしばしばでありましたが、先生は懐メロには目もくれず、常に、新しい楽曲にチャレンジしておられるのがとても印象的でした。改革派の面目躍如、進取の気性のなせるわざかと敬服しておりましたが、

こちらの方面でも勉強熱心のご様子で、すぐにマスターされて、次なる楽曲へと歩みを進めておいででした。

一度、体調をくずされてからは、お酒もほどほどにされているご様子ですが、いつまでも末永くお元気で、お酒と歌をお楽しみいただきたいものと、念じております。そして、時には、叱咤激励に、あるいは、加須の地酒をお楽しみに、大学へお越しいただきたいものと、念じております。

末筆ながら、平成国際大学の窮地を救ってくださいまして、本当に有難うございました。あらためて、衷心からの御礼と感謝を申し上げ、献辞とさせていただきます。